

PURE 5

C o n t e n t s

P U R E 5 5

特別番外編
しあわせの実感 267

PURE 5

1 新しい年の朝に

薄暗い中、目を覚ました早瀬川愛美は、数分布団の中でもごもごしたあと、まず片足を布団の外に出してみた。今朝はまた、かなり冷え込んでいるようだ。

彼女はゆっくり身体から布団を剥がし、起き上がった。寒いけれど心は弾んでいた。

お正月なのだ。優誠さんと、初日の出を見に行ける……

喜びが膨れ上がり、愛美は微笑んだ。

不破優誠は彼女の婚約者だ。愛美が危険に晒されていると知り、急遽アメリカから帰ってきてくれた彼は、いま彼女の家で寝泊りしている。

愛美は、足の傷のところに触れてみた。少し引きつるような感覚はあるものの、もう痛みはない。包帯の上からふくらはぎを数回撫でたあと、彼女は着替えを取り出した。

急いで着替えないと、身体が冷え切ってしまう。持っている中で一番厚手のコートデュロイのパンツを穿き、シャツも厚地のものを選んだ。それに自分で編んだクリーム色のセーターを重ねる。

あとはコートを羽織ってゆけば、寒さを充分防げるだろう。

最後に全身をチェックした愛美は、首を傾げた。

いまはこれでいいけど……日の出を見て、戻ってからはどうしよう？

元且くらい、少し改まった服を着たいけど……スカートを穿くと、包帯が見えてしまう。

昨日、包帯を目にするたびに、優誠さん、顔を曇らせてたし……

やはり、パンツを穿いたほうがいいだろうか？

愛美は顔をしかめた。

それに、明日も……

明日は父の実家である蔵元の家に行くことになっている。包帯を巻いているのを見たら、誰だっ
て気になるだろう。きつと、どうしたのかと聞かれるに違いない。

彼女が死にかけたなんて話は、できれば隠しておきたいのだが。けど、着てゆけそうな服は、ワ
ンピースやスカートばかり。パンツスーツなど、持っていないし……

愛美は思案しつつ部屋を出た。まっすぐ洗面所に向かう。

まずはコンタクトをつけなきゃならない。ぼんやりした視界では不便だ。

居間の前を通り過ぎようとしていた愛美は、話し声を耳にし、足を止めた。

この声……不破と父のようだ。

一番に起きたつもりでいたのに、すでにふたりとも起きていたらしい。

苦笑していた愛美は、もうひとり別の声を聞き取り、思わず瞬きした。

この声は、上島さん……

そうだった、上島がいたのだ。すっかり忘れていた……

ということとは？ わたしが一番最後に起きたってこと？

愛美は自分を笑いながら、その場を離れた。

上島は、不破家の執事をしている人物だ。いや、していたというべきだろうか？

彼は愛美のことを庇^{かば}ったために、不破の父の不興を買ってしまい、失職してしまったのだ。それがなんと昨日のこと。

底冷えする寒さに、厚手の靴下を履いていても、爪先^{つまさき}がジンジンする。

こんな時間、親友の桂崎^{かづの}百代^{ももよ}はまだ、布団の中で丸くなって寝ているに違いない。その様を思い浮かべて愛美は微笑んだ。別荘で年を越している、もうひとりの親友である藤堂^{とうどう}蘭子^{らんこ}も、百代と同じように寝ているのだろうし……

不破家のクリスマスパーティー以降、ずっとぎくしゃくしていた蘭子とも仲直りができた。

年明け、蘭子と学校で会うのが楽しみでならない。また三人で……

嬉しさを噛み締めた愛美だったが、不破のことを考えて暗い気分になった。

その頃には……不破はまたアメリカに行ってしまったている。

仕事なのだから、仕方のないことだ。

いま、彼はここにいる。せめて、一緒にいられるときを楽しまなくては……

愛美は自分に言い聞かせた。

洗面所でお湯を出し、温^{ぬる}んでくるのを待って、顔を洗いコンタクトと格闘した。

コンタクトの着用が日課になったが、まだ慣れないせいで、装着に手こずることもある。だが、

今日は楽勝でつけられた。たったそれだけのことなのだが、年明けに、幸先^{さいさい}のよさを感じて嬉しくなる。

明るい視界を手に入れた愛美は、にっこり微笑んだ。コンタクトというものは、本当に世界を明るくしてくれる。

愛美は鏡の中の自分に「おめでとう」と言い、居間に足を向けた。

「お嬢様、お早いのですね」

「上島さん」

「あけましておめでとうございます。お嬢様」

台所の前で鉢合わせした上島から丁寧^{ていねい}に頭を下げられ、愛美は慌てた。

「あ、あ、あけましておめでとうございます」

言葉を詰まらせながら言った愛美に、上島はさらに深々とお辞儀を返してくる。

正直、お嬢様という呼び名にはクレームをつけたいのだが、やめておいた。彼には彼なりの、心地良いやり方というのがあるのだろうし、あれこれ禁止されると困るに違いない。

「朝食の支度をさせていただけようと思うのですが……。お雑煮などは、やはりご家庭の味がおありでしょうし……」

「あ……そ、そうですね。いえ、いいですよ」

なんと返事をすべきか迷い、しどろもどろになっていると、上島は気落ちした表情になった。そ

れを見て、慌てて言葉を足す。

「あの、上島さんの味付けで構いません」

上島は途端に嬉しげな顔になった。

「それでは、私に任せてくださるのですか？」

「は、はい。よろしくお願います。あの、でも台所の使い勝手とか、材料とか」

「まだ時間は充分にございますから、これから台所の中を確かめさせていただこうと思います。よろしいでしょうか？」

「よろしいですので……あ……上島さんの好きに使ってください」

思わず言葉がへんてこになり、恥ずかしさに愛美は赤くなつたが、上島は感激して目を潤ませている。

「お嬢様……ありがとうございます」

「は、はい。あの、それじゃ、あの、よろしくお願います」

愛美はべこべこと頭を下げ返した。

できればお客様として、滞在してもらつたほうが、愛美としてはやりやすいのだが……

お客様の立場に甘んずるくらいなら、上島はここを出てゆくと言うに違いない。

「お嬢様、何かご用事などございましたら、なんなりと、この上島に申しつけてくださいませ」

「どうやら彼は、何もかも、ひとりでやるつもりらしい。」

正直眩暈がした。

「台所、かなり寒いんです。暖房すぐに入れますね」

「暖房は徳治様が入れてくださいました。それよりお嬢様、優誠様が居間でお待ちでございます。

初日の出をご一緒に見にゆかれるとお聞きました。早くお出かけになりませんと、日が昇つてしまつてもいいですね。朝食の用意は、この上島に、安心してお任せくださいませ」

愛美は外に目を向けてみた。確かに、上島の言うとおりだ。

「それじゃ、あの、上島さん、よろしくお願います」

愛美は急いで口にする、上島を気にしながらも居間に向かった。居間には、不破と父がいた。部屋はすでに充分温まっている。いったい彼らは何時に起きたのだろうか？

「おはようございます」

「おう、愛美、おはよう。新年だな。おめでとう」

「あ、うん。お父さん、あけましておめでとう」

愛美は父に向けて挨拶し、はにかみながら不破を見上げた。

「まな、おはようございます」

「優誠さん、おはよう……ございます」

不破が新年の挨拶をしなかったことに、照れを感じた。昨夜、ふたりきりで新しい年を迎え、新年の挨拶もしてしまっている。そのときの、不破との親密なふれあいを思い出してしまい、愛美は頬を染めた。

「それでは、まな、ゆけますか？」

椅子の上に置いてあったコートを取り上げながら不破が言う。

「あ、はい。コ、コート取ってきます」

愛美は急いでコートを取りに行った。戻つてくると、不破は居間の前で待っていてくれた。

「それじゃ、ゆきましようか？」

愛美は嬉しさを噛み締め、不破のあとに続いた。

外の空気は刺すような冷たさだった。ふたりの吐く息が白い。

愛美は手を握り合わせ、口元に持つてきて、はーっと息を吐きかけた。

「まな」

不破が手を差し出してきた。手を重ねると、ぎゅつと握り締めてくれる。外気に触れて、すでにどちらの手も冷たかった。それでも触れ合いは、胸に温かい。

不破は自分のコートのポケットに、握り合ったふたりの手を入れた。

心臓が高鳴る。

まるで恋人同士みたい……

思わずそう考えた愛美は、吹き出しそうになって、ぐつと堪えた。

わたしつてば……みたいじゃなくて、ちゃんとした恋人同士なのに……

それでも、恋人という言葉はなんとも面映い。

愛美は歩きながら寄り添っている不破を見上げた。彼女を見つめていたらしい不破と目が合い、

ふたりは見つめ合った。ポケットに入っている不破の手に、やんわりと力が込められ、胸が甘く膨らむ。目指す場所に着くまで、ふたりは言葉を交わさずに歩き続けた。

愛美が日の出を見るために選んだ場所は、採土場の脇の小道を登ったところだ。道幅が狭いうえにいささか傾斜の強い坂道で、その急勾配を初めて目にした不破は、眉をひそめた。だが、異議を唱えることなく、彼女が榮に登れるように手を貸してくれる。

太陽は、ふたりが登りきるまで待つてはくれず、坂道の途中で足を止めて、日の出を眺めることになった。

莊厳という言葉がぴたり当てはまるような景色、そして神々しい光。

その光は、心に直接差し込んでくるような気がした。

自分の身体が透明になったような不思議な感覚に浸りながら、愛美は不破をそっと見上げた。尊いものを見るような眼差しで、不破は顔を出したばかりの太陽を見つめていた。

朝日に照らされている彼の端正な顔を、愛美は息を詰めて見つめた。

不破の青い瞳は、神秘的な色に変わっていた。

愛美の視線に気づいたのか、不破が顔を向けてきた。

「この光景は、言葉にできませんね」

頷いた愛美は、太陽に目を向けたが、すでに高く上がってしまつて、もう直視することは難しくなった。

「上まで登つてから、帰りますか？」

「ですね。せっかくここまで来たんだし……とつても素敵な眺めなんですよ」
ふたりは、ゆっくりとした歩みで、頂上を目指した。

「確かに素晴らしい眺めだが……まな、ここは少々寒いようですね」
寒さに身を縮こまらせている愛美に、不破は笑いながら言う。

「え、ええ、優誠さん、もう下りましょう」

愛美は急いで提案した。

景色は見事でも、この身を切るような冷たい風には、さすがに耐えられない。

坂を下りようと、不破に背を向けた途端、愛美は後ろから抱きしめられていた。

「ゆ、優誠さん」

「せっかくこんなところまでやってきたのです。そうだな……何か記念になるものが欲しいですね」
耳元で聞こえるその言葉には、特別な甘さが含まれていた。

その声の響きに愛美の身体の芯が震える。

「き、記念？」

不破の唇が愛美のうなじに触れた。

冷たく柔らかな唇の感触に、愛美の鼓動は急激に速まってゆく。

愛美の身体を自分のほうに向かせた不破は、互いの両手を繋ぎ、彼女の表情を味わうように見つめながら、ゆっくりと顔を寄せてきた。

唇を触れ合わせ、顔を上げた不破は、満ち足りた笑みを浮かべた。

「まな……こうして、貴方といられる現実……私にとって、夢のようだ」

不破の顔を見つめていた愛美は、思わず右手を上げて、不破の頬に触れていた。

彼の存在を確かめたかった。夢のようだと思わずに、愛美はこのしあわせな現実が、本当に夢なのではと感じられてならない。まるで夢物語のようで……

「まな」

不破の唇から、愛美の名が零れた。

彼女は不破の頬を両手でそっと挟むと、爪先だつて唇を重ねた。

2 贈り物の配達人

初日の出を見て戻ってきたときには、美味しそうな雑煮ができていた。しかも、それだけでなく、気の利いた和え物なんかも小鉢に盛られている。それらの料理は、どこにあったのか、彼女がこれまで見たことのない、一人用の塗りの盆の上に載せられ、おまけに綺麗な箸袋に入った箸が添えられていた。愛美は箸袋を驚きの目で見つめた。

「これ？ もしかして、上島さんの手作りですか？」

「はい」

上島は、みなと同じ席に座っているのが落ち着かないらしく、居心地悪そうに身動きしながら返事をした。箸袋に墨で書かれた「寿」の文字の見事さに、愛美は見惚れた。

上島さん、す、凄いひとだ。

「上島の料理の腕は確かですよ。冷めないうちに、いただきますせんか？」

不破の勧めで、みんな箸を手を取った。「いただきます」とめいめい口にし、食べ始める。

「上島さんって、不破の家の執事さんなのでしょう？ 食事の用意も上島さんがなさるんですか？」

「普段は作っておりません。専任のコックが数名おりますので。ですが必要に応じて、手伝うことがございます」

「そうなんですか」

「味付けが、皆様のお気に召すといいいのですが」

「うまいですよ」

「徳治様、ありがとうございます」

「徳治でいい。様付けなど必要ない」

「は、はあ。それでは……徳治さんと……よろしいでしょうか？」

「ああ、それでいい」

「はい。それではそう呼ばせていただきます」

愛美はふたりの会話を聞きながら、お雑煮を啜った。ダシが効いていてとても美味しい。

「上島さん、とても美味しいです」

「お嬢様、ありがとうございます」

「あの、上島さん。わたしも愛美でいいです。愛美さんとかで……」

「は、はあ……」

ひどく困った様子の上島に、彼女は首を傾げた。

父のときには、すぐに承知してくれたのに、なぜ悩むのだ？

「上島は、貴方を愛美さんとは呼べないでしょう」

不破の言葉に愛美は困惑した。

「どうしてですか？」

「上島は、私のことを、様付けで呼んでいます」

「それが？」

「貴方は私の妻となるひとだからです。まあいまは、クビとなっている身ですから……呼び名にこだわる必要はないと私は思います……」

「優誠様」

「上島、好きに呼ばせてもらえばいい」

くすくす笑いながら不破は会話を締めくくり、上品な仕草で雑煮を食べ始めた。

不破は当たり前のように言ったが、愛美は落ち着かなかつた。不破家の人々は、やはり愛美とは生きる世界が違うのだ。

「それにしても、見事な器ばかりですね」
食事を終えて片付けを始めた上島が、感服したように言った。彼は父が作った皿に、惚れ惚れと見入っている。

「食器棚に並んでいる器の数々に、目を見張りました。見事な陶器ばかりを、あれほど揃えておいてとは……本当に驚きました」

「そ、そうですか？」

「ええ。正直申しまして、器として使うのはもったいないと思いました。床の間に飾れば、さぞ、映えるでしょうに」

上島の言葉に、愛美はどんな顔をしていいやら困った。上島はこれらの陶器を、買い求めたものだと思っっているようだ。食器棚には愛美が作った陶器もかなりあるというのに……

当の上島は、器に夢中になりすぎて、徳治や不破が笑いを堪えている様子にも気づかないようだ。「この小鉢、これは、どなたの作でございますか？ なんともまるやかな味わいの器で、不破の屋敷にも、ひと揃い欲しいものですが」

上島は、徳治に顔を向けて尋ねた。

いまの彼は、不破家をクジになったことすら失念しているようだ。

「上島、言うのを忘れていたが……」

不破から話しかけられ、上島は徳治から不破のほうへ顔を向けた。

「優誠様、なんでございましょう？」

「その小鉢は、愛美が作ったものだ」

徳治が言った。不破を見つめていた上島は、また徳治に顔を戻した。

「は？」

「ずいぶんと怪訝な顔になってしまっている。」

「ご冗談を……」

「いや、そうなんだろう。徳治さんがそうおっしゃるのだから。そうか、これはまなの」

不破は上島の手から小鉢を取り、じっくりと眺め始めた。

「手触りがいい。それに、上島が言ったように、まるやかな味わいがある」

「そ、そうですか。優誠さん、ありがとうございます」

褒められすぎて、照れくさくてならず、愛美ははにかみながらお礼を言った。

「ほ、本当に、愛美様の作なのですか？」

驚きさめやらぬ様子で、上島は叫ぶように言う。

「ああ。徳治さんは陶芸家でいらっしゃる。大学の教授でもあられる」

「こ、これは。窯の仕事……そういうえば、昨夜そのようなことをおっしゃっておいででした。あのときはなんのことかわからずにおりまして……。な、なんとも、知らぬこととはいえ……ご無礼を」
「褒めてくれたんですから、謝る必要はないでしょう」

「愛美様まで陶芸家でいらしたとは」

「いえ。わたしはまだ、そういうんじゃない」

そのとき、タイヤが砂利を踏む音が聞こえた。

「誰かしら？」

「あいつしかいないだろう。……だが、顔を出すのは昼からだろうと思っていたんだが……」
三次のことを言っているのだろう。蔵元三次は、愛美の叔父で、父の腹違いの弟だ。
徳治が窓に近づいていくのを見ながら、愛美は三次を迎えようと、玄関に向かった。
上島は、客が来たことを知り、片付けの手を早めたようだ。

玄関の扉に手をかけようとしたところで、不破が「まな」と声をかけてきた。

「はい」

「私の知り合いのようです」

不破の言葉に、愛美はどきりとした。

ま、まさか、不破の両親が？

で、でも、いまはまだ、アメリカにいらっしやるはずで……

「優誠さん、どなたが？」

「ともかく、どうして来たのか、話を聞いてきましょう」

不破は靴を履き、外に出ていった。

誰が来たのか気になってならなかったが、外に出て、不破の知り合いと顔を合わせる勇氣はなかった。

お盆に皿を載せた上島が姿を見せた。玄関のほうを気にしつつも、そのまま台所に入ったが、またすぐに出てきた。

「愛美様、洗い物は私が片付けますので、そのままに」

早口に言いながら上島は靴を履き、急いで外へと出ていく。

上島の様子に不安が煽られた。

まさか本当に、不破の両親がやってきたんじゃないかと、どうしよう……

「愛美」

玄関の扉を見つめていた愛美は、父の声に振り返った。

「お父さん、ゆ、優誠さんの……」

「ああ。不破の屋敷のひとりらしい。林田というひとだそうだ」

は、林田？ 不破の両親ではなかったのか？

安堵した愛美は、林田という人物についての記憶を探した。

曖昧にしか覚えていないが……不破家で会った婦人が、確か林田という名前だった気がする。

愛美はためらいながらも靴を履き、外に出てみた。大型の車が停まっただけで、不破はやってきた男女ふたりと話をしている。上島も不破の横に並んでいる。

婦人の顔を確認した愛美は、ほっとした。やっぱり、あのひとだ。不破の屋敷で、温かな笑顔で、愛美を迎えてくれたひと。

不破と話していた林田の視線が愛美に向いた。目が合った瞬間、林田は嬉しそうに微笑みかけて

きた。不破も、林田の視線を追うように振り返る。

「まな、徳治さん」

いつの間にやら、父も出てきていたらしい。振り向くと、父は彼女の真後ろに立っていた。

「優誠君、外は寒い。中に入ってもらいなさい」

「はい」

不破は頷き、ふたりに、家に入るよう促した。

「それでは、お持ちした品を……」

林田の隣に立っている男のひとが言ったが、不破は首を横に振った。

「いや、それはあとにしましょう」

「ですが、優誠様、この方を早くお帰ししたいのです。今日はお正月ですので、無理を言って、お願いしたもので……」

林田は不破にそう説明し、男のひとに申し訳なさそうな視線を向けた。

どうやらこの男のひとは、不破家の使用人ではないらしい。

「そうできましたら、ありがたいです」

にこやかな笑みで男のひとが言う。

不破が頷くと、そのひとはすぐに車の後部に回り、トランクを開けた。

上島と林田のふたりもさっと動き、トランクから出した荷物をそれぞれ抱える。

いったい、なんなのだろう？ かなりの荷物だ。旅行帰りかと思うような、大きなスーツケース

まである。

荷物を出し終えた男のひとは、皆に向けて頭を下げると、車に乗り込んで早々に敷地から出ていった。

「林田さん、持ちましょう」

不破は林田に手を差し出したが、林田は一步後ろに退いた。

「とんでもございません、優誠様。わたしは大丈夫でございます」

断固とした林田の態度に、不破は仕方なさそうに、ふたりを引き連れて、玄関のほうへ戻ってきた。愛美は父と玄関に入り、そこで三人を迎えた。

両手に持っていた荷物を、断りを口にしながら上がり口に置いた林田は、愛美と徳治に改まった顔を向け、深々と頭を下げた。

「新年早々、突然にお邪魔致しまして、誠に申し訳ありません。私、不破家でお世話になっております、林田と申します」

「堅苦しい挨拶は必要ない。さあ、上がってください」

「まあ、ありがとうございます」

林田は愛美に顔を向けた。

「お嬢様、またお会いできて、うれしゅうございます」

そう言って丁寧な頭を下げる。愛美も同じだけ頭を下げた。

「林田さん、いらっしやい。どうぞ、上がってください」

領いたものの、林田は上がろうとせず、先ほど自分が上がり口に置いた荷物を抱え上げると、不破に場所を譲った。どうやら、不破より先には上がれないということらしくった。

「上島さんがこちらにおいでとは、思ってもいませんでした。驚きましたわ」

居間に落ち着いたところで、林田は笑みを浮かべてそう言った。

林田は、上島がクビになったことを、まだ知らないらしい。

「そういえば昨日、貴方は不破の家にいませんでしたね？」

不破の問いに、林田は頷いた。

「はい。三日ほど留守にしておりましたので。出先から直接参つたんですよ。もう間に合わないのではないかと、本当に気を採みました」

「この住所を、誰からお聞きになったんですか？」

「あ、はい。大奥様からのお電話で」

「ああ。祖母から」

不破は納得したように頷く。

彼の祖母はアメリカに住んでいるのだ。不破は仕事でアメリカに行くと、必ず祖母の家に滞在させてもらっている。

「はい。旦那様から、申し付かりまして……」

「父上？」

不破は怪訝な顔をする。もちろん、林田の言葉には、愛美も戸惑った。

ふたりの反応に、林田のほうも困惑したようだ。

「は、はい、そうです。旦那様が、お嬢様に贈り物をしたいとのこと……」

「贈り物？ 本当に父が？」

「は、はい」

林田は、不破の反応に目をぼちくりさせた。嘘偽りを言っているとは思えない表情だ。だが、不破の父が愛美に贈り物なんてありえない。だって、彼女を庇った上島は、昨日、解雇されてしまっているのに……

愛美は眉を寄せている不破と目を合わせ、首を捻った。

3 必要のない恐れ

「紅色のものもよろしいかと思つたのですが……お嬢様には、この薄桃色の着物がお似合いかと思ひまして……。いかがでしょうか、愛美様？」

「あ、は、はい、とても素敵な柄です」

居間の床には、林田が持ってきた、不破の父からの贈り物だという着物一式が広げられていた。着物を着るのに必要な、すべての小物が揃えられているようだ。

素敵な柄などと、普通に感想を述べたものの、実際は眩暈めまいを覚えていた。

これって……いったい、いくらしたのか……？

愛美は、黙って座っている父を、救いを求めるように見つめたが、父は眉を上げただけで何も言わなかった。

「お嬢様にお似合いな柄を選ぶのに、そうは時間をかけていられなくて……。すぐに仕立てていた
だかなくてはならなかったものですから。気に入っていただけなかったらどうしようかと、もうそ
ればかり」

仕立てて……もらったのか、たったの三日で……暮れの忙しい時期に……

「き、気に入りました」

声がうわずった。

「本当でございますか？ ああ、安堵致しました」

林田はほっと胸を撫なで下ろし、笑みを浮かべて、広げられた着物に、そっと指で触れた。

「昨日のうちにお届けしたかったのですが、出来上がったのが昨日の夕方……それからすぐに出発
とは、さすがにお願いできなくて……」

「林田さん、ひとつ聞きたいのですが」

不破に声をかけられた林田は、さっと彼に向き直り、小さくお辞儀をした。

「はい。優誠様、なんぞございませうか？」

「この贈り物は、本当に父から？」

「さようでございますよ」

林田の答えに、不破は眉を寄せ、顎あごに指を当てて考え込む。

「父から、直接頼まれたんですか？」

「あ……いえ、大奥様から電話をいただきましたまして、旦那様がお嬢様に振袖を贈りたいとのことだか
ら、よろしく頼むと」

「祖母が」

「は？」

その会話で愛美は納得した。やはり、不破の父からのはずはない。これは不破の祖母が、孫と息
子の仲直りのきっかけにと、気を回してくれたということなのだろう。

「あの？ 優誠様、何か？」

「ああ、別にたいしたことでは……」

不破は言葉の途中で顔をしかめ、言葉を止めた。

「いや、そうは言えませぬ……」

言葉を言い改めた不破は苦笑した。

「いったい、あの、優誠様？」

「父からということ、ありえないのですよ。林田さん」

「はい……？」

「上島は昨日、父から暇を出されたのですよ」

「はあ？」

林田は、しばしばかんとした顔になったが、やがて眉をひそめた。

「年明け早々、そんなご冗談をおっしゃるなんて、優誠様らしくございませんわ」

「それが、冗談ではないんです」

上島は、面目なさをそうに言い、視線を落とした。

「だから、いま、私はこの家にお世話になっているのです」

「そんな馬鹿な。どうして上島さんが暇を出されるのです？ なんの手落ちがあったと……」

「上島は、彼女のことについて、父に抗議してくれたのですよ。それで父は激怒し、上島を解雇した」

「そ、そんな……そんな……旦那様が……そんなことをなさるわけが……」

「私もそう思った。だが、現に上島は暇を出され、ここにいる」

「そんな……信じられません。ありえませんか」

林田の困惑は深まるばかりのようだった。

「旦那様は、お嬢様と優誠様のことをすでに許しておいでです。この着物が、それを証明してくれていますわ。そうではございませんこと？」

不破は、林田と目を合わせ、ゆっくり首を横に振った。

「上島の解雇については、腑に落ちないものがあることは確かです。ですが、彼女への贈り物を頼んだあと、上島を解雇するなど……矛盾している」

確かに不破の言うとおりで。

そう聞いても林田は納得できないようだったが、反論もできなくなり、肩を落としてしまった。見ている愛美のほうが申し訳ない気分になってきた。

「わ、わたしは……そんな……」

不破は林田に近づき、その背に手を触れた。

「祖母がよかれと思っただけのことです。この贈り物が誰からであろうと、彼女は喜んでくれます」

「は、はい。そのとおりです」

愛美は急いで同意し、言葉を添えたが、顔を上げた林田の目は、失意のためか涙で潤んでいた。

「林田さん。ともかく、愛美様に着ていただいたらどうでしょう」

取り成すような上島の言葉に、林田はこくこくと頷いた。

「は、はい。お嬢様さえよければ……」

涙を拭きながら林田は言った。

「あの、お願いします。ぜひ」

愛美は林田の気を引き立てようとして、思わずそう口にしていった。

林田が嬉しそうな笑みを浮かべてくれ、愛美はほっとした。

「まな、とてもお似合いですよ」

「そ、そうですか？」

愛美は照れつつ答えた。

林田に着付けてもらった着物。着慣れないから、ちよつと窮屈ではあるが、不破も気に入ってくれたようで嬉しかった。本当に素敵なお柄だ。上品だけど華やかさもある。髪も手際よく結び上げてくれ、この着物にぴったりの髪飾りまでつけてもらった。

昼食の準備は上島と林田のふたりで引き受けると言われ、愛美は不破と一緒に墓地への小道を歩いているところだった。

愛美たちが家を出る前に、徳治は工房にこもってしまったが、これは毎年のことだ。父にとっては、神社に初詣に行くようなものなのかもしれない。新しい年を迎え、陶芸の神に感謝と祈りをささげているのではないだろうか？

墓地に着くと、愛美は入り口のところで手を合わせた。墓地全体を見回していた不破も、同じように手を合わせている。

年が明けてここに来ると、新年を迎えたという感覚がより強くなる。

愛美はひとつひとつの墓に、不破とふたり、ゆっくり手を合わせて拝んだ。

祖母の墓を、愛美はじつと見つめた。

彼女の祖父である蔵元徳三の妻だったひと……精神を病み、自ら命を絶つたひと……

徳三は、妻の死はすべて自分のせいだと罪の意識を抱え、いまだ苦しみから抜け出せずにいる。

苦しみが癒され、この墓地に祖父が訪れる日が、いつかやってくるだろうか？

過去を思い、胸が疼いた。

もちろん生まれていなかった愛美に何ができたわけでもない……それでも、それでも……もどかしさが心の中から噴き出してくる。

「まな」

不破の声に微かな震えを感じ取り、愛美は不破と視線を合わせた。

家柄の釣り合わない蔵元家に嫁いだ祖母。愛美は瓜二つと言っていいほど祖母に似ている。そして、祖母同様に愛美も、家柄の釣り合わない不破家に嫁ぐことになる。

不破は不安を抱えている。愛美もまた、彼女の祖母のように精神を病んでしまったらと……実際、愛美は不破家に嫁ぐことにためらいを感じているし、恐れてもいる。

だけど……わたしは大丈夫だ。

不破と生きるために与えられる試練ならば、どんなことも受け入れ、必ず乗り越えてゆく。

「わたしは大丈夫です」

「辛い思いをしたり、苦しいときには、どんなことも、私に話してくださいませね？」

「はい」

「必ず」

「はい。必ず」

愛美がそう答えても、不破は不安を拭えないようだ。

もしかすると、愛美の言葉には、彼女自身も気づかない不安が潜んでいるのかもしれない。不

破はそれを感じ取っているのだろうか……？

「私は、全身全霊をかけて、まな、貴方を守る」

「優誠さん、大袈裟です」

愛美は不破の真剣すぎる気持ちを和らげたくて、冗談めかしてそう言った。

「この着物の贈り主が、本当に父なら良かったのに……上島のことになかったら、私はなんの疑いもなく林田さんの言葉を信じたでしょうね」

着物を見つめる不破の、哀しげな眼差し……

愛美は不破の腕に手をかけ、彼の胸に顔を埋めた。

「お父様は、どんな方なんですか？」

小道をゆつくりと並んで歩きながら、愛美は不破に尋ねた。

「厳しいひとであることは確かです。ですが、理不尽なひとではない」

自分の言葉を信じて欲しいというように、不破は彼女の瞳を見つめてくる。

愛美は彼に応えて頷いた。不破は前方に視線を向けて、また口を開いた。

「貴方への仕打ちは、許せることではありません。ですが……公平なひとです」

矛盾したことを言っていると思つたのだろう、不破は困つたような表情になった。

愛美はそんな不破に向けて微笑み、頷いてみせた。

不破の父なのだ。きつと、彼の言うとおりのひとなのだろう。

「ひとを驚かせるのも好きなんです。ですから……今回の上島のこと、何か考えがあつてのこ

となのではないかと……」

不破は口を閉じて考え込み、しばらく歩いたあと「……もしかすると……」と呟いた。

「もしかすると……？」

「いえ。これは私の勝手な想像でしかない」

「話してくださいませんか？ お聞きしたいです」

「上島は、解雇になつていないのかもしれない」

「えっ？ どういうことですか？」

「さあ。私にもわかりません。ただ、今回のような抗議をしたくらいのこと、父は上島を解雇しないだろうと……。それだけはないかと思ふんです」

不破はもどかしげに息を吐いた。

「だが、父は解雇した。とすれば、父にとって、上島を解雇したという事実が、どうしても必要だったのでは……」

「よく……わかりません」

「ええ。当然です。私にもわからない」

不破は肩を竦め、くすくす笑う。

愛美は足元を見つめた。不破は自分の父親を、よく知っている。だが、それは身内に接するときの不破の父で、他人に接するときの父親とは、まったく別なのではないだろうか？

愛美は、不破の知らない、彼の父の別の面を見たということなのでは？

いや、違う……そうではない。

不破は、父親のいくつもの面を知っているはずだ。たった一度しか対面していない愛美が受けた印象など……それこそ不破の父の一面でしかないのだ。

愛美は大学の推薦入試の面接で、初めて会った自分の祖父を思い出した。あのとき、愛美は祖父に激しい恐れを抱いた。それからの彼女は、祖父は恐い人物だという印象を持ち続けた。けれど、あれにはわけがあつたのだ。祖父は、愛美が、自分の亡き妻にそっくりだとは知らなかった。だから愛美を前にして、平常心ではいられなかったのだ。

それゆえ向けられた容赦のない言葉の数々に、愛美は怯え、それ以後、祖父を恐れるようになってしまった。祖父に対して抱いている恐れ……これはすでに必要のない恐れなのか？

同じように、不破の父に対して抱いているこの恐れも、捨ててしまふべきではないのか？

隣を歩く不破が足を止めたのに気づき、愛美も歩みを止めた。言葉なく見つめられる。彼の青い瞳に見入っていると、不破は手を上げて愛美のうなじに触れてきた。

長い指で後れ毛をやさしく撫でられ、首筋にぞわぞわとした感覚が広がる。

「私がアメリカに戻る前に、ふたりでどこかへ出かけませんか？」

不破の言葉に胸が切なく疼いた。いまはこうして一緒にいられる。けれど、いずれ彼は再びアメリカに行ってしまう。

「いつ……いつアメリカに？」

「学校の休みはいつまでですか？」

「十一日です。十二日が始業式です」

「それなら、十二日に、貴方を学校に送って、それから」

考えていたよりも、ずっと長くいてくれるとわかり、愛美は嬉しくなった。

「それまでは、ずっとここにいてくださるんですか？」

「ずっといても？」

問うような不破の言葉に、愛美はさらに顔を明るく輝かせた。

「もちろんです。上島さんも優誠さんがいたほうが、絶対居心地がいいと思うし」

不破が苦笑した。

「上島は、なるべく早くに、不破の家に戻したい」

「そ、そうですね」

だがそのためには、不破は自分の父親と会って話をする必要があるだろう。

不破の両親は、いつ日本に戻るのだろうか？

「明日にでも、父に電話をかけて、じっくり話をするつもりです」

愛美の心の問いが聞こえたように不破が答える。彼は顔を曇らせた彼女を見て、安心させるように微笑んだ。

「新しい年を迎えたのだし、父も少しは頭が冷えたでしょう」

「そうだろうか？ そうだといいのだが……」

「それで、まな。どこに行きたいですか？」

不破は愛美を抱き寄せながら言う。

いろんなことが起きすぎて、今後どうなっていくのかわからない。それでも、いま……愛美は不破の腕に包まれている。

「優誠さんが行きたいところなら……」

白いものがふわりと目の前を掠め、愛美は言葉を止めた。

「雪……」

「本当だ」

愛美は不破の胸に抱かれたまま、空から舞い落ちてくる雪を見つめた。

4 しづしづの撤退

家に戻ったふたたりを、林田は待ちかねたように迎えた。

「わたしは、一度戻って、また夕方こちらにお邪魔したいと思っておりますが、よろしゅうございますか？」

「それは……まな、構いませんか？」

「あ、はい」

「それでは家まで送りましょう」

林田は、不破の申し出にとんでもないというように、手を振った。

「それには及びません。もう迎えをお願いしてあります」

その言葉どおり、すぐに不破家から迎えがやってきた。運転手は、以前、愛美を駅まで送ってくれたひとだった。愛美は不破と一緒に挨拶した。

「優誠様、大奥様から電話がございました」

「祖母は、なんと言ってきました？」

「それが、旦那様が今夜には日本に戻られるとのことですよ」

運転手の言葉を聞いた愛美は、思わず不破を見上げ、彼と目を合わせた。不破は小さく頷き、また運転手に顔を向けた。

「父だけですか？」

「奥様は、まだしばらく向こうにご滞在されるそうです」

「そうですか」

不破の父が戻ってくる。

愛美は落ち着かない気分になった。

今日は元日だというのに、急遽戻ってくるというのは、息子と会って話すために違いない。昨日、アメリカに戻るように命じられた不破が、それを拒否したから……

不破は眉を寄せて考え込んでいたが、愛美が不安な面持ちで自分を見つめていることに気づくと、安心させるように微笑みかけてきた。

そのあと、運転手は上島としばらく外で話し込んでいたが、その後、林田を連れて帰っていった。

「今年の正月は賑やかだな」

徳治は豪勢すぎるお節をつつきながら、そう言つて苦笑した。

愛美は父の言葉に同意しつつ、目の前の料理を再度見回して思わず笑ってしまった。三次が注文してくれたお節は、彼女がこれまで見たことがないほどの豪華版。さらに上島の手によって作られた料理まで、所狭しと並べられている。

こんなに賑やかな正月を迎えられるなんて想像もしなかった。

父とふたりきりだった去年の正月を思い出し、愛美は胸が切なくなった。

互いにおめでどうと言葉を交わしあつたけれど、どちらも心から新年を祝う気持ちにはなれていなかった。

母がいない現実を、父も愛美も受け入れることができていなかった。ふたりの心は……満ち足りることがなかった。

美味しそうに料理を食べながら、不破や上島と語り、愉快そうに笑っている父を見つめ、愛美は目を潤ませた。

こんな日を迎えられるなんて……

きつと誰よりも、母が喜んでくれてるに違いない。

「明日、おふたりが蔵元に出かけている間、私は家に戻つて父と話をしてこようと思います」
食事を終えたところで、不破がそう切り出した。

蔵元の家に一緒についてきてくれるのではと期待していた愛美は、内心がっかりした。

「そうか。優誠君、負けるなよ」

父の冗談めいた激励に、不破はやわらかく笑いながら「はい」と答えた。

なんだか明日の訪問が、突如重みを増し、胸がつぶれそうになる。

愛美は思わずため息をついていた。

「まな、どうしたのですか？」

「い、いえ。なんでもないです」

愛美は赤くなりながら、手を振った。

不破と離れたくない。離れると不安に取りつかれる。もう逢えないような気がして……

百代に電話してみようか？ いつでも電話してくれればいいと言ってくれたし……

三次は、二時を過ぎた頃に戻ってきた。

「なかなか抜け出せなくて……」

玄関先で出迎えた愛美の振袖姿を褒めたあと、居間に入って椅子に座り込んだ三次は、新年の挨拶をしてから不服そうに言った。

「無理して来なくて良かったんだ」

「退屈な客の相手なんかしていたくありませんよ。言っておきますが、本来これは兄さんの仕事なんですからね」

徳治の言葉にむつとしたらしく、三次は切り口上で言い返す。

「おかしなことを言うな。そんなもの私の仕事じゃない」

切り捨てるように言った兄を、三次は睨みつけた。

「あ、あの」

おずおずと声をかけてきたのは上島だった。台所にいたはずだが、客が来たのに気づいて顔を出したのだろう。上島の姿を目にして、三次は眉を上げた。

「上島さんですよ。不破家の……」

三次は上島がなぜここにいるのか疑問に思っただろうが、それ以上に、上島は、三次がやってきたことに戸惑っているようだ。

「どうしてこんなところに？ 不破氏を迎えにでもいらしたんですか？」

上島も同じ質問をしたいところだったがに違いないが、先に問われて首を横に振った。

「い、いえ。そ、そうでは……。蔵元様は……あの？」

「私ですか？ 徳治は、私の兄なのですよ」

上島はぼかんとし、それから何かに気づいたようにハッと喘いだ。

「蔵元のご長男様……ま、まさか！」

「上島、落ち着け。言うのを忘れていた。徳治氏は、蔵元家のご長男だ」

「こ、これは……で、では、愛美様は蔵元家の？ ……な、なんと申し上げればよいのか」

「何も言う必要はありませんよ。上島さん、事実は事実。それより、お節は、美味しかったのかな？」

「はい。とつても美味しかったです」

愛美は感謝を込め、お節を手配してくれた三次に頭を下げた。

「ありがとうございます」

「それはよかった。それで上島さん？」

「は、はい」

「貴方は、不破氏を迎えに来たのでなければ……何をしに？ ここに遊びに来たなんてこと……なにせ今日は正月の、それも元日だし……ありそうもないが……」

「そ、それは……」

「上島さんは、ここにしばらく逗留することになった」

徳治の言葉に、三次は眉を寄せた。

「逗留？ なぜ？」

「明日、私らがここを留守にするから、留守番をしてもらおうのさ」

「留守番？ しばらく逗留するって言いましたよね？」

徳治はくすくす笑い、上島のほうを向いた。

「上島さん、こいつに茶でも入れてやってくれませんか？」

「はい。何がよろしゅうございますか？」

「なんだ。もう不破氏の入れたお茶は飲めないわけですか？　こんなことなら、もつと飲ませてもらってあげば良かったな」

「ゆ、優誠様が……お、お茶を？」

「上島、私が茶を入れたくらいで驚くな。私にだってそれくらいのことはできるぞ。言わせてもらえば、夕食を作る手伝いだってしたんだぞ」

「ああ。正直、役に立ったかは疑問だがな」

徳治から辛口な評価をもらった不破は、愉快そうに笑った。

上島は眩暈めまいでもしたのか、額を押さえた。

「それじゃ、そうだな。コーヒーをいただいてもいいかな？　上島さん」

「は、はい。承りました。いま……すぐに」

上島は額から手を離し、几帳面なお辞儀をすると、少しふらつき気味に部屋を出ていった。

「それで？　父はどんな様子だ？」

さっそく切り出された話に、三次は渋い顔になった。

「不機嫌ですよ」

三次はぶつきら棒に口にした。

「まあ、そうだろうな」

「ですが、……来るのを拒んでいるわけでは……」

「自信がなさそうだな？」

三次はもどかしそうに両手を握り合わせた。

「父の心の中は、誰にもわかりませんよ」

「それはそうだな」

「それで、その……父を、この家に招いてくれませんか？」

「わかった」

徳治はあっさり承諾した。そのことに、三次はいくぶん驚いたようだが、頷くとまた口を開いた。

「断るに違いありませんが、……できれば、繰り返し誘ってもらえたら……」

「わかった」

ふたりの会話を聞いていて、愛美はひどく気が滅入ってならなかった。

どうしてなのか、蔵元に行くことを考えるだけで、気分が沈んでしまう。

そんな自分が、自分でも嫌なのだが……

明日が来なければいいとまで考え始めている自分が、愛美は理解できなかった。

「愛美さん」

「はい？」

「明日もその振袖を着ていらつしやるといい。父にも貴方の振袖姿を見せてやって欲しいんです」

愛美は内心弱った。振袖姿の愛美を、祖父が見て喜ぶとは、どうしても思えない。

「なら、私は紋付でゆこうか？」

その言葉に、愛美は父に顔を向けた。

「兄さんは、ステテコでもももひきでもなんでも勝手に着てくればいい」
徳治の冗談に、三次は真顔で返した。

「そうか。おい、愛美？」

「はい」

「買い置き、新しいステテコはあったかな？」

三次に負けないほど真面目な父の顔を目にして、愛美は派手に吹き出した。
ステテコなんて持っていないくせに……

「お父さんったら……蔵元さん、わたし、自分では着物の帯が結べせんから」

「ああ、それなら林田さんに、明日の朝、来ていただきましょうか？」

不破の言葉に愛美は慌てて手を振った。

「そ、そんなご迷惑、かけたくありません」

「それなら、一之瀬の叔母のところに着付けをしてみようといいですよ」

そう言ったのは三次だった。一之瀬の叔母と三次が言うのは、徳三の妹である一之瀬琴子のことだ。愛美にとっては大叔母ということになる。愛美は三次に顔を向けた。

「一之瀬の？」

「ええ。あそこのお手伝いさんは、着物好きな叔母の着付けを手伝っているようですから、振袖の帯でも大丈夫なんじゃないかな。電話で聞いてみましょうか？」

愛美の返事も聞かぬまま、三次は電話に歩み寄り、受話器を持ち上げた。

「三次だけど。……ええ、叔母は近くにいますか？ ……はい、お願いします」

電話に出たらしい大叔母の琴子と話をし、通話を終えた三次は、受話器を戻すと愛美に向かつて頷いた。

「大丈夫だそうです。それなら、明日は一緒に蔵元に行こうと言っていましたよ」

「一之瀬の叔母か……ずいぶんひさしぶりだ」

そう言った徳治は、どうしたのか顔をひどく曇らせた。

「明日は、謝罪しなけりやならんな」

「叔母に？」

「ああ。妻を……恵依子を亡くして……葬式に来てくれたのに……私は、もうここには来てくれるなど言った。あの頃、愛美は中学で……蔵元のことは封印しておきたかったんだ」

「そうだったんですか」

「だが、叔母は私に隠れて、愛美と会っていた。誕生日に贈り物を渡されたことがあってね。二度とこんな真似はしないでくれと……。いま考えると、ずいぶんと理不尽なことをした……」

「謝罪したければ、明日すればいいことですよ。叔母さんは兄さんを恨んでなんかいませんよ」

「だろうな。父の妹にしては、人柄がいいからな」

「そんな言い方をしたら、僕たちの父親は人でなしみたいに聞こえますよ」

「愛想がいいひとじゃない。愛美、明日はどんな言葉が父の口から飛び出るかわからんが……年寄りだと思っただけ許してやってくれ」

「そ、そんなこと……」

「それは、僕にすれば、兄さんに言いたい言葉だな。こんなに長いこと仲違いなかつたしたままで……いい加減仲直りして欲しいですよ。まったく傍迷惑だ」

「まあ、善処するさ」

「あてにならない言い方だな」

渋い顔で三次は言った。

しばらくして三次が帰り、夕方近くになると、林田がやってきた。

林田は上島を手伝って夕食を作ってくれ、愛美と一緒に脱いだ着物をしまってくれた。

不破は、林田が帰るまでの間に、彼女と色々話をしていたようだった。

四人での夕食を終え、食後の飲み物を飲むと、上島は自分の部屋に引き取ってしまった。自分の存在が、なるべく邪魔にならないようにと、上島は遠慮しているように思えた。愛美はそんな上島が気の毒で、一日でも早く、彼の本来の場所である不破の家に戻れるようにと、願わずにはいられなかった。

「徳治さん、お話があるのですが……」

不破は少し緊張した面持ちで、徳治に話しかけた。

「なんだ？ いい話か？」

話し出す前に、そんな風に徳治から尋ねられ、不破は苦笑いを浮かべた。

「徳治さんにとって、いい話とはゆかないかもしれませんが……」

「そうか。まあ、聞くだけは聞いてやろう。話してみる」

「明日、おふたりは蔵元家に行かれる。その結果、蔵元との縁が復活する可能性が……」

「それはどうかな」

「ですが、復活の第一歩となるのは確かだと思います」

「それで？」

「不破家と蔵元家の結婚式ともなれば、かなり大規模なものになると思います。ですが、愛美さんも私も、大掛かりな結婚式など望んでいません。愛美さんが卒業されたら、ささやかな式を挙げることを許していただけませんか？」

愛美は驚いて不破を見つめた。

もちろん、このことについて不破と話したことはあった。だが、いま不破が持ち出すとは思わなかったのだ。

「君のご両親は、いいのか？」

「式には呼ぶつもりです」

しばらく、しーんと静まり返った。腕を組んで考え込んでいた徳治が、やっと口を開いた。

「私は賛成できないな。君のご両親を粗末に扱いきじやないか？」

徳治はそこまで言って、なぜか口を閉じてしまった。

「実を言えば……」

言いくそうに父は言い、大きく息を吐くと、また語り出した。

「私も同じようなことをした。……優誠君、私は君にとやかく言える立場じゃないかもしれん。だが、愛美には、君の縁者に、温かく迎えられての結婚をしてもらいたい」

「おっしゃることはわかります。ですが、それが難しい状況であることはわかってくださるはずです。すべての問題をクリアするまで、結婚を先延ばしにするのは……私には……」

不破はぐつと奥歯を噛み締め、俯うつむいてしまった。

「……そうだな……」

徳治は腕を組み、しばらく考え込んでから口を開いた。

「愛美」

「はい」

「優誠君とふたりきりで話したいことがある。お前、先に休め」

「どうして？ わたしがいちゃダメなの？」

「ああ。これからあとは、男同士の話つてやつだ。お前だって、女友達としか話せないことがあるだろう？」

不満を感じたが、どうやらこの場に愛美がいては、話したいことが話せないらしい。

愛美はしぶしぶ立ち上がり、おやすみなさいと言って居間から出た。

寝る前に洗面所で歯を磨いていた愛美は、無意識に足踏みしている自分に気づいて笑いが込み上げた。今夜は冷え込みが厳しいようだ。厚手の靴下を履いていても足先が冷たくなってくる。

布団に入っても、なかなか温まらないのよね。優誠さんも……寒いんじゃないかしら……

そうだ！

愛美はいいことを思いつき、急いで洗面所から出た。

「たぶん、このあたりに……」

納戸の物入れの中に頭を突っ込むようにして、愛美は目的の物を探した。

「ここにがあるはずなのだが……」

「えーっと、あつ、これじゃないかしら」

銀色の丸っこい形をした湯たんぽを取り出した愛美は、ほっとして笑みを浮かべた。

よしよし、これで優誠さんのお布団を、あつためておける。

湯を沸かして湯たんぽに入れ、タオルでくるんだ愛美は、不破が使っている部屋に行った。いまは不破の私室となっているから、ちよつとためらったが、きつと不破は気分を書いたりしないはずと自分に言いきかせ、中に入らせてもらった。

不破がやってきてから入ったのは初めてで、なんだかドキドキする。何もなかった部屋だが、いまは不破の荷物と、見たことのない温風ヒーターが置いてあった。そして、押入れにも真新しい布団のセット。父が不破のために揃えてくれたらしい。

不破が、寒い部屋で凍えるようなことがなくてよかったと、愛美は父に感謝しつつ、布団を敷き、足元のあたりに湯たんぽを入れた。

これでよしっ。湯たんぽのある部分をポンポンと叩き、愛美は立ち上がった。

優誠さん、湯たんぽにびつくりするだろうか？ いや、だいたい湯たんぽなんてもの、使ったことがないに違いない。もしかしたら、見たことすらないかも……

愛美は、声を潜めて笑いながら不破の部屋を出た。

自分の部屋に戻った愛美は、部屋の様子を眺めてくすりと笑った。不破のクリスマスの贈り物でいっぱい部屋。机の上に飾った小さな白い薔薇の蕾に、愛美は微笑みかけ、ガラスでできた可愛らしい天使を包み込むように手に取った。

愛美の世界は、不破がおしげもなく注いでくれる愛で満ちている。

彼の世界も、わたしの愛で満ちていたらいいのに……

5 憂鬱な訪問

「まな、朝食の前に、少し散歩してきませんか？」

居間のソファに並んで座っていた不破が、そう提案してきた。

愛美は迷いながらも頷き、外に出てみることにした。

冷たい朝の外気を吸い込んだら、少しはラクになるかもしれない。今朝は、目覚めたときから、体調が優れない。胸のあたりを中心に、身体が重くけだるいというか……

みなを心配させないように、普段どおりにふるまっているつもりだったが、誤魔化せてはいなか

わかってるんですから」
愛美は笑みを浮かべ、並んで歩いている不破を見上げて言った。
不破は愛美を見つめ返し、首を横に振った。
「まな。私を心配させまいとしての言葉など必要ありません。貴方の心が重荷を抱えていることはわかってるんですから」

「わたしは大丈夫ですから」

愛美は笑みを浮かべ、並んで歩いている不破を見上げて言った。

不破は愛美を見つめ返し、首を横に振った。

「まな。私を心配させまいとしての言葉など必要ありません。貴方の心が重荷を抱えていることはわかってるんですから」

目を合わせて彼の言葉を聞いていた愛美は、唇を噛み締めて俯いた。

不破が愛美の髪に触れ、そっと指に絡めた。

「貴方のために、何もしてあげられないとは……もどかしくてならない」

不破の思いがストリートに伝わってくる。愛美は、癒しを与えられたかのように、胸に取り付いていた重みが軽くなるのを感じた。

「わたし……」

顔を上げた愛美は、不破の目を見つめ、言葉を探した。

やさしく促すように不破は頷いてみせた。

「自分でも何故だかわからないんですけど……蔵元の家に、行かなければならないって、すごく強く思うんです。けど、その思いが強すぎて、胸を圧迫されているような感じで……」

愛美は自分の胸のあたりを押さえながら、訴えるように言葉にした。

不破が、愛美の手に手を重ねてきた。

「あったかい」

愛美は笑みを浮かべて、そう言った。そんな彼女を見て、不破は少しほっとしたようだった。

「やらなければならぬことだから……。いまのわたしはこんな風ですけど……蔵元から帰ってきたときには、きつと普通に帰っています」

不破は黙って頷いてくれた。彼は、愛美の状態をすべてわかってくれている。

彼女はいま、乗り越えなければならぬ壁を前にして、一時的に精神が不安定になっているのだ。「私もついてゆければ、少しは貴方の支えになれるのに……」

そうしてもらえたら愛美だって嬉しい。本当は、そうしてもらいたい。けど……

愛美はゆるく首を横に振った。

「優誠さんも、やらなければならぬことがあります」

「そうですね。それでも……」

「わたしには、これがあるから……だから大丈夫です」

愛美は首もとのネックレスに触れて言った。不破が誕生日にくれた、小さな白薔薇のついでにネックレス。もらった日からずっと身につけているそれは、いつでも愛美の心を支えてくれる。

「優誠さんを感じていられる。それに……ほら、これも」

愛美はコートのポケットから、蘭子にもらったクリスタルの石を取り出し、空にかざした。

綺麗にカットされた透明の石は、朝日を受けて、美しい光を放つ。

同じ石が触れるほど近くに並び、愛美は彼女と同じように石を差し上げている不破に顔を向けて微笑んだ。不破が蘭子にもらった石だ。

「この輝きが、いまの貴方に必要なだけのパワーをくれるといいのですが……」

そう口にした不破は、ふたつの石を軽く触れ合わせた。

カチンと澄んだ音が青空に響き、ふたりは微笑み合った。

「愛美様、もうよろしいのですか？」

「はい。もう。……上島さん、残してしまっごめんさい」

上島の用意してくれた朝食をほとんど残してしまつた愛美は、恐縮して頭を下げた。

胸がむかむかして、どうしても口に入ってゆかない。気分もますます悪くなる感じだ。

みんなに心配などかけたくないのに……

去年の冬に編んだ若草色のセーターと、薄茶色のパンツに着替えた愛美は、コートを手にして、

みんなと一緒に外へ出た。一之瀬の家で着物に着替えることになったおかげで、何を着てゆくか迷わずに済んだ。

不破は自分の車で、一之瀬の家に行く愛美たちと同時に山の家を出発し、不破家に行く。

愛美が車に乗り込むと、不破は彼女の肩にそっと手を置き、「まな」と気がかりそうに呼びかけてきた。祖父との対面に向けて、愛美の緊張が増してきていることを敏感に感じ取っているのだろう。

「大丈夫です。優誠さんも、あの……」

「私も大丈夫ですよ。激情に駆られて父を殴ったりなどしませんよ」

笑みを浮かべて冗談を言う不破に、愛美はほっとして笑い返した。

不破が自分の車に乗り込み、二台の車は上島の見送りを背に、出発した。

途中まで父の車のあとをつけてきていた不破の車は、交差点で別方向に進み、見えなくなってしまう。後方に目を向けていた愛美は、しょぼくれつつ前を向いた。そんな愛美を、父親が笑いながら見ていたが、愛美はまるで気づかなかった。

「まあ、素晴らしい振袖でございますねえ」

振袖を見てひとしきり褒めた一之瀬のお手伝いさんは、とても慣れた手つきで、あつという間に着物を着付けてくれた。

髪は編み込みにして、後ろでまとめ上げてくれ、最後に大きな和風柄のリボンがつけられた。

振袖姿の愛美を見た大叔母の琴子は、感極まったように涙を零し始めた。

「お、大叔母さん」

愛美はうろたえたが、琴子は「なんでもないの」と手を振る。

「でも……ああ、なんと言えよいかわからないわ……」

琴子が、なぜ泣き出したのか、もちろん愛美はわかっている。振袖姿の愛美を見て、琴子は、愛美にそっくりな亡くなった祖母のことを思い出したのに違いない。

涙を拭いている琴子を見つめ、愛美のためらいが増す。

愛美を見たら、祖父は苦しむだろう。それがわかっているのに……それでも行かなければならぬのだろうか？

愛美は祖父を苦しめたくないのに……。だが、それは祖父のためになると、父も琴子も三次も、考えているのだ。

愛美は、自分を見つめている父と大叔母を見て、腹を括った。

これが愛美に与えられた役目ならば、どんなに嫌でもやり通そう。

「そろそろ行かないと、三次が目くじらを立てるでしょう」

「まあ、確かにそうね」

徳治の言葉に、まだ涙を流しながらも、琴子は笑い声を上げた。

愛美が着付けをしてもらっている間に、父と琴子は仲直りして、昔のことを水に流したようだ。

慣れない着物のせいか、愛美は車に酔ってしまった。気分の悪さは気の重さに拍車をかけ、彼女の精神と肉体を締め付けてくる。

「愛美さん？」

「は、はい」

「気分が優れないのではなくて？　なんだか顔色が悪いようだわ」

「愛美、どうした？　具合が悪いのか？」

「い、いえ。大丈夫です」

愛美はなるべく普通に聞こえるように答え、ふたりに気取られないように、ゆっくりと息を吸って吐いた。

「慣れない着物を着て車に乗ったから……そのせいです、きつと」

「我慢せずに、いつでも言えよ。車、停めるからな」

「う、うん。ありがとう、お父さん」

「大丈夫かしら？」

大叔母に心配をかけているのが心苦しく、愛美は精一杯の笑顔で、後部座席の琴子に振り向いた。「大丈夫です」

これ以上、ふたりを心配させないよう、愛美はなんとかリラックスしようと努めた。ちよつども救いになるかもと、彼女は蘭子からもらった石をバッグから取り出して握り締めた。蘭子と百代のふたりで選んでくれた石なら、絶対にご利益がありそうだ。

気の持ちようなのか、少しずつ胸の締め付けがゆるみ、楽になつてきたように思えた。

そういえば、百代に電話をしようと思っていたのに、結局しないままだった。百代の声が聞けたら、もつと落ち着けそうなのに……

もちろん不破の声も聞きたい。けど、彼とはいま別れたばかりだ。

不破は、夕方か夜には戻ってくるはず……

本当に戻ってくるだろうかという不安を含んだ心の声に、愛美は耳を塞いだ。

「着いたわ」

琴子の言葉に頷きながら、愛美は目の前に迫ってくる屋敷を見つめた。

大きな門を抜け、そのまますすぐに進む。

周りは日本庭園という感じだ。古いまま、維持されているような……

周囲を見回していた愛美は苦しさを感じて初めて、自分が息を止めていることに気づいた。

蔵元の屋敷は、あまりに彼女の想像どおりで、気味が悪いほどだった。

無意識に息を止めてしまっていたのは、そのせいだ。

「変わらないな」

父がぼつりと言った。

「外観はそうね。でも内装は、貴方がいたときとは、変わっているところもあると思うわ」

琴子の言葉に、父は神秘的な顔で頷く。

父にとつて、何十年ぶりの帰宅……。愛美などには窺い知れない、深い思いがあることだろう。

車が玄関前で停まり、まず父が降りた。彼女はなかなか踏み切りがつかず、助手席に座ったまま萎縮していたが、父が足の悪い琴子に手を貸そうとしているのに気づき、急いでドアを開けた。

すぐさま降りて、自分も手を貸そうと思っただが、気分が悪くてならず、立っているのがやっどだった。着物は着てこないほうが良かったかもしれない。

後悔をし始めていた愛美は、玄関が開いたのに気づき顔を向けた。

迎えに出てきたふたりの女性は、緊張した面持ちで、三人に向けて歓迎の挨拶をし、かしこまってお辞儀した。正月だからか普段からなのか、ふたりとも地味な着物を身につけている。

ふたりが頭を上げたとき、聞きなれた声が飛んできた。

「早かったね」

三次の出迎えに、愛美はほっとした。

「父は？」

「奥にいる……というか……自分の書斎に引きこもり」

「兄さんったら……」

琴子は瞳に不安をちらつかせつつも、呆れたように言う。

「さあ、入って」

三次は場を和ませようとしてか、気楽な口調でみんなを促した。

父のあとから中に入った愛美は、五、六人のひとが出迎えにきているのに気づいた。みんな、三人に向けて深々とお辞儀していて、なかなか顔を上げない。

「失礼する」

父は頭を下げている人たちに向けて言い、靴を脱いで屋敷に上がった。やたら威厳のある声で、父が父でないような、変な感じがした。

彼女は「お邪魔します」と小声で言いながら、家が上がらせてもらった。

この家特有の香りが、漂っている。嫌な匂いではないのに、その香りを嗅いでいると、さらに気

が重くなってゆくようだった。精神的なものなのだろうと思う。

これから祖父と会わなければならぬのだ。祖父は愛美を見て、どう思うだろう？

亡くなった前妻にそっくりな孫など……祖父にとつて……

「あ、あら」

突然、曲がり角からひとが現れた。上品な感じの婦人だった。

「お出迎えが遅れてしまって……ま、まあ、徳治さん……」

婦人は、徳治を見て感極まったような声を上げた。

「お義母さん、おひさしぶりです」

父の言葉で、この婦人が誰だか愛美にもわかった。

このひとは、三次の母であり、父にとつては義理の母なのだ。

「そ、そう呼んでくださるの？」

「もちろんですよ。こんな老けた男に、お義母さんなどと呼ばれたくはないかもしれませんが」

「まあ、徳治さん、そんなことあるわけがないわ」

三次の母は、ひとのよさが顔に滲み出ている、とても感じの良いひとだった。

目元が三次に似ているようだ。

「母さん、父さんは？」

「ごめんなさい。なんともできなくて……」

肩を落として息子にそう言った三次の母の目が、愛美に向けられた。

三次の母と目を合わせた愛美は、挨拶の意味で頭を下げた。

「愛美さんですのね？」

「は、はい。はじめまして」

愛美の挨拶に対して、三次の母は含みのある笑みを浮かべたように見え、ちよつと気になった。「三次の母の康子やすこです。いらしてくださって嬉しいですわ」

和やかな歓迎の表情に、愛美はほつとした。三次の母は味方のようだ。

そう考えた愛美は、眉をひそめ、心の中で自分を叱責しっせきした。

味方などと言ったら、まるで祖父が敵のようではないか……

康子が先に立つて歩き、愛美たちはそのあとに続いた。

通されたのは、外観からは想像もつかないような洋風の部屋だった。応接間なのだろう。広々として、ちよつとしたパーティとかもできそうだ。全体的に淡い若草色で統一され、家具も高級感をそれほど感じさせない、居心地の良さそうな部屋だ。

草原みたいだ……それが愛美の第一印象だった。

きっと、康子の好みでコーディネートされたのだろう。

この部屋は好きだ。……とても……

そう思った愛美は眉を寄せた。なんだか歌声のような明るい声が……微かに聞こえたような……まるで、この部屋に天使や精霊のような不思議な存在がいて、歌を歌っているような……その歌

のおかげで、この場の空気が柔らかく弾んでいるような……

愛美は自分の想像を笑った。きっと、耳に聞き取れないほどの音量で音楽を流していたりするのだろう。

「出てくるつもりはあるのか？」

愛美は視線を父に向けた。父の言葉は、三次に向けられたものらしい。

「わからない……兄さんから出向く？」

「来ないなら、行くしかあるまい。父に会うために来たんだからな」

「お茶を飲んでからになさったら。それまでに出ていらっしやるかもしれないし……」

康子の言葉には、そうであって欲しいという望みが含まれているようだ。

「お義母さん」

「は、はい、なんでしょう？」

「父は扱いやすいですか？」

「まあっ」

康子は声を上げ、困ったような笑いを浮かべた。

「ますます扱いづらくなっているわけですか？」

「……あのひとは、ご自分を責め続けていらっしやるの」

「私の母のことです？」

「ええ。それと……恵依子さんにしてしまった仕打ちについても……」

愛美は驚いて康子を見つめた。父も驚いたらしい。

「恵依子？ 仕打ち？ いったいなんのことです」

徳治の言葉に、康子はひどく慌てたようだった。

「あ、ま、まあ、ご存知では……え、恵依子さんは、徳治さんに何も？」

「いったい何が？ 三次、お前、何か知っているな？」

徳治は三次に鋭い視線を向けた。

「やっぱり知らなかったのか。そうじゃないかとは……」

「何があった？ 恵依子を父と会わせたことは……」

言葉を途切れさせ、ハツとした様子を見せた徳治は、顔をしかめて三次を見つめた。

「恵依子は、……ここに来たのか？」

その質問を受けた三次は、しばし兄を見つめ返したあと、「一度だけ」と答えた。

「お前、そのとき、恵依子に会ったのか？」

「会った」

「何があった？」

「二度と来るなど言った」

男性の重く低い声に、愛美はぎよつとして後ろを振り返った。

場が静まり返った。突然現れた徳三は徳治と長い間見つめ合っていた。

徳治の肩が徐々に強張りこわばを増していくのは、誰の目にも明らかだった。

徳治は肩を怒らせて、父親に詰め寄っていった。

「どういうことですよ！」

「いま言ったとおりだ。二度と蔵元の敷居をまたぐなど言った」

表情が抜け落ちた、まるで能面のような祖父の目が、愛美に向けられた。

愛美は凍りついたように祖父を見つめた。

足元がぐらりと揺れた。

目になっている景色がゆっくりと傾かいでゆく……

三次の叫ぶ声が聞こえ、傾いた角度で立っている父が愛美を振り返った。

頭の中が爆発したような衝撃を感じた瞬間、目の前が真っ暗になった。

6 夢彷徨さまよう心

愛美は泣いていた。

母の腕に抱かれているのに、恐ろしくて恐ろしくて震えが止まらない。

彼女を痛いほどの力で抱きしめている母の身体からも激しい震えが伝わってくる。

泣いている……母が泣いている……

その事実に恐ろしさが増し、愛美の恐怖はどんどん膨れ上がってゆく。